伊勢の中世

第　３　１　９　号
伊 勢 中 世 史 研 究 会
令和７年１月 15 日発行

事務局：〒515-2321　三重県松阪市嬉野中川町 1524－121　竹田憲治方
メール　takeda@ztv.ne.jp　ホームページ　http://mietyusei.bakufu.org/

令和５年度　コロナ禍後の南勢地方の御頭神事等の実施状況について

筆者はこれまでにも本誌において、コロナ禍が無形民俗文化財に与えた影響について、三重県南勢地方で行われる御頭神事の実施状況に焦点をあててレポートを行ってきた。過去の内容は、令和２～４年度の順に本誌第 283 号、第 300 号、第 308 号に掲載させていただいた。なお、過去の状況については改めて聞き取り調査等を行い追加・修正した部分がある。今回は、新型コロナウイルスが感染法上の５類感染症に移行した後となった令和５年度に御頭神事の実施状況がどのように推移したのかを報告するものである。

各地の実施状況と昨年度との比較

筆者は、例年１月～２月にかけて伊勢市等の南勢地域の各地区で無病息災等を願って催行される御頭神事等について、コロナ禍の影響が生じ始めた令和２年度から定点的に実施状況を確認してきた。それぞれの地域では、これまで受け継がれてきた伝統行事の実施と新型コロナウイルスの感染防止の狭間で苦悩していた状況が見られた。その中で、各地区においてそれぞれの地域性の中でさまざまな方法で実施がなされていた。その実施状況について、「従来通り」、「規模縮小しつつ舞を実施」、「御頭を飾るのみ等」、「神職等による神事のみ」、「中止」、「不明」の６つに分類し、令和２年度～令和５年度の状況を表 1 にまとめた。表は、筆者が直接現地を見学したほか、関係者等からの情報等を基に作成し、開催日時順に 29 地区の事例から作成した。なお、作成にあたっては現地での聞き取りの他、関係者への電話取材、過年度にさかのぼっての聞き取りなども含まれるため、情報の確度が低いものも含まれており、一部誤りがある可能性もあることをご了承願いたい。

表１から、これまでの４か年の推移をみると、令和５年度では中止が０件となり、コロナ以前の形での実施に復活した事例が 19 件（約 65%）となり、社会生活全般と同様にコロナ禍の収束によりかつての神事の状況が取り戻されたことが見て取れ、祭礼行事が社会の動向と密接に連動していることが改めてわかる。特に、玉城町山神の事例は、過去 3 ヶ年すべて中止で、神事の継続を危惧していたが、今年度は復活された。

一方で、コロナ禍を契機に地域の少子高齢化による担い手不足などの課題がさらに顕在化したことで、神事の内容が見直され事例もみられた。伊勢市有滝の事例については、『伊勢の中世』第 309 号に詳述したので参照されたい。また、伊勢市茜社について、コロナ禍においても神事が実施されてきたが、巡行や各所での舞が縮小された。度会町下久具では、

コロナ禍を挟んで神事の実施時間が日中のみとなった。同町一之瀬では地区内４地区で対応が分かれており、地区ごとの社会的状況により縮小の動きが見られる。

催行日	場所	R2	R3	R4	R5	備考	自治体	指定
1 月 8 日	茜社	■	○	□	□	社頭のみ、 長峯神社、巡行なし	伊勢市	
1 月 13 日	世木神社	×	□	□	○		伊勢市	
1 月 14 日	有滝	×	■	■	□	タコ投げ場所の変更 辻舞の縮小	伊勢市	
1 月 14 日	箕曲中松原社	□	□	□	○		伊勢市	
1 月 14 日	上社	□	□	○	○		伊勢市	
1 月 14 日	二見・西区	□	□	□	□	コロナ以前から簡素化	伊勢市	
1 月 28 日	山神	×	×	×	○	４年ぶりの開催	玉城町	県
2 月 4 日	下久具	□	×	□	□	実施時間の変更	度会町	県
2 月 10 日	村松	■	■	○	○		伊勢市	市
2 月 10 日	棚橋	□	□	□	○		度会町	県
2 月 10 日	高向	×	△	○	○		伊勢市	国
2 月 11 日	前野	×	×	○	○		明和町	町
2 月 11 日	官舎神社	○	△？	□	○		伊勢市	市
2 月 11 日	中須	■	■	■	■	コロナ以前から飾るのみ	伊勢市	
2 月 11 日	城田神社	×	■	△	○		伊勢市	
2 月 11 日	掛橋	？	□	□	○		伊勢市	市
2 月 11 日	磯	？	？	■	○		伊勢市	
2 月 11 日	豊浜 （森地区）	？	？	□	○		伊勢市	
2 月 11 日	豊浜 （上地区）	？	？	■	■			
2 月 11 日	須原大社	△	△	△	？		伊勢市	
2 月 11 日	坂社	□	□	□	○		伊勢市	
2 月 11 日	今社	□	□	□	○	社頭、各辻での舞のみ	伊勢市	
2 月 12 日	一之瀬	× (■)	× (■)	□	□	南中村：地区舞・内回り、脇出・市場：地区舞、和井野：飾るのみ	度会町	県
2 月 17 日	東大淀	△	■	□	○		伊勢市	県
2 月 18 日	宮古	■	■	■	○	夜は雨天のため変更か	玉城町	県

2 月 18 日	田丸神社	□	□	□	○		玉城町	町
2 月 23 日	有田神社	□	□	□	○	西回り：井倉のみ舞 東回り：西新村、妙法寺舞	玉城町 伊勢市	
？	世古	□	□	□	？	各戸訪問のみ実施	玉城町	
？	斎田	？	？	■	？		南伊勢	

○：例年通り、□：規模縮小等あるが舞があった、■：飾るのみ等、△：神事のみ、×：中止、？：不明

表１　令和２～５年度　御頭神事等の実施状況（色塗りの地区は筆者が直接見学したもの）

	R2	R3	R4	R5
○	1	1	4	19
□	10	11	16	5
■	5	7	6	2
△	2	3	2	0
×	6	3	1	0
？	5	4	0	3

表２：実施状況集計表

個別事例

以下、筆者が直接見学した個別事例を紹介したい。

□：規模縮小型　茜社

伊勢市内の山田産土八社と呼ばれる市街地の御頭神事は、周辺の御頭神事と比較して頭屋祭祀の色合いが薄く、神社を中心として例大祭の一つという位置付けが強い印象を受ける。茜社もその特徴が強く、御頭神事は神社関係者および豊川町、旭町、藤里町の氏子総代によって神事が進められ、村松町の神楽師を呼んで舞を行っている。

茜社では、御頭神事に合わせて氏子域の小学生を対象にした書初め会を実施し、神社と地域の結びつきを強める取組みが行われている。書初めの題字には「御頭神事」も含まれ、作品は社務所に掲示するとともに、コンクールの入賞者には神事の祭典と合わせて表彰式が行われる。この取組みによって、書初めの関係者が父兄も合せて大勢が御頭神事を参観することに繋がっている。

一方で、神社境内での御頭神事は盛況であるものの、コロナ禍を契機に氏子域への巡行が縮小され、御頭が地区を巡行することで家々の厄を除災する本来の在り方から変容が見られる。巡行縮小の背景には、氏子総代の負担軽減や、受け入れ側の負担軽減および神事への意識の希薄化があるように見受けられた。

□：規模縮小型：一之瀬

一之瀬の獅子神楽は、南中村、脇出、市場、和井野の四地区にそれぞれ獅子頭が伝来し、各地区で舞が行われる点に特徴がある。

コロナ禍の中での実施状況については、各地区で対応が分かれており、地区ごとの担い手などの課題が表面化してきている。令和５年度については、脇出、市場ではそれぞれの地区公民館で舞が行われたが、和井野は獅子頭を飾るのみであった。また、例年午後から４地区が一之瀬神社に参集し、神社境内で実施される奉納の舞も行われなかった。他方、

南中村ではかつて実施していた地区内を獅子が巡行する「内回り」が令和４年度から復活され令和５年度も実施された。合わせて、地区公民館での舞も行われた。

まとめ

少子高齢化や人口減少による担い手不足による各地区の祭礼行事の継承が課題となっている中で、コロナ禍が発生したことによって各地区の御頭神事がどのような影響を受けたのか、令和２年度から令和５年度までの４年間の推移を調査してきた。全体の傾向としては、コロナ禍を乗り越えて復活を果たしているが、個々の事例を見ていくと担い手不足や関係者の負担など共通する課題が見られ、従来通り実施できている地区であってもこのまま継続していけるのか大きな危機があるといえる。

現地での調査を通じて、祭礼行事が地域社会と深く結びつき、社会情勢の写し鏡のように地域の問題が表出すると改めて感じた。文化財という一面的なアプローチではなく、社会全体の課題解決の中で将来への継承を考える必要性がある。また、今回のような調査の前提には、調査時点よりも前の時点で克明な調査が個別になされていることが必要であり、そのことで比較による変容が捉えられる。また、定期的な調査の蓄積によって小さな変容も把握できることから、繰り返し調査を行う必要もあるといえる。

筆者の遅筆のため、レポートが遅れてしまい令和６年度の御頭神事の時期になってしまった。本レポートが厳しいコロナ禍での取組み状況を知る手がかりとなり、大変な危機を乗り越えた推移を知ることで今後起こりうる継承の危機を克服する一助になれば幸いである。本稿の執筆にあたり、各地でご協力くださった関係者の皆様に深くお礼申し上げます。

（味噌井　拓志）

茜社の御頭神事（伊勢市）と氏子児童による書初めの展示　　４年ぶりの催行となった山神の獅子舞（玉城町）

地元住民も参加しコロナ禍以前の活気の中で催行された棚橋の御頭神事（度会町）

４地区で対応が分かれる中、南中村ではかつての内回りが復活し、地区での舞が実施された。

一之瀬の獅子神楽（度会町）